

だれか僕に
翼をください。

1988年カンヌ映画祭
新人監督賞受賞

エリック・ロメールに見い出され、フランソワ・トリュフォーの再来と称賛された
「白い婚礼」の
ジャン＝クロード・ブリソー監督・脚本作品
DE BRUIT ET DE FUREUR

かごの中の 子供たち

スタッフ●監督・脚本／ジャン＝クロード・ブリソー 製作／マルガレット・メネ
ゴ 撮影／ロマン・ウィンディング 編集／マリア・ルイザ・ガルシア 音楽／ル
イ・ジメル 衣装／リサ・ガルシア キャスト●ブルーノ／ヴァンサン・ガスブ
リッシュ ジャン＝ロジェ／フランソワ・ネグレ マルセル／ブリュノ・クレメー
ル 女教師／ファビエンヌ・バブ

ASCII アスキー映画配給

かごの中の 子供たち

— DE BRUIT ET DE FUREUR —

『かごの中の子供たち』は、ジャン＝ピエール・リモザン、レオス・カラックス、エドゥアール・ニールマンらと共に、80年代にデビューした最も才能豊かなフランス映画作家のひとりに数えられるジャン＝クロード・ブリソーの長編第三作である。

映画の舞台となるのはパリ近郊にある労働者の町・バニョレ。非行や犯罪の温床として知られるH・L・M(低所得層住宅)に住む子供たちの殺伐とした現実とひとりの孤独な少年の内面的な軌跡を描いたこの作品は、86年にフランス最優秀脚本賞を獲得し、88年カンヌ映画祭では新人監督賞をブリソーにもたらすなど、極めて高い評価を得ている。

フランス公開に際しては、このカンヌ映画祭での受賞映画を18歳未満への鑑賞禁止作品に指定したことから、議論がまき起こった。暴力描写に加えて、階層的貧困や、《移行学級》と呼ばれる〈落ちこぼれクラス〉に集められ、教育の場からも見捨てられつつある子供たちの問題など、パリ近郊の低所得者地域における社会的荒廃をストレートに描いていることが、この映画のフランスでの扱いをいっそう微妙なものにしたようだ。

多感な14歳の少年ブルーノを演じるのは、ブリソー自身によるオーディションで抜擢された、ヴァンサン・ガスプリッシュ。この作品が映画初出演。

いっぽう、物語の展開の中心となるもうひとりの不良少年ジャン＝ロジェには、若手俳優のフランソワ・ネグレが起用されている。レオス・カラックスの『汚れた血』では主人公のアレックスの不良仲間扮演し、ルイ・マルの『さよなら子供たち』では、ゲシュタポに密告する皿洗いの少年役を好演した彼は、90年代の飛躍を最も期待されているフランス人俳優のひとりである。この映画で演じた役柄に



監督
ジャン＝クロード・ブリソー

スタッフ●
監督/脚本 ●ジャン＝クロード・ブリソー
製作 ●マルガレット・メネゴ
撮影 ●ロマン・ワシントン
編集 ●マリア・ルイザ・ガルシア
音楽 ●ルイ・ガシム
衣裳 ●リサ・ガシム
キャスト
ブルーノ ●ヴァンサン・ガスプリッシュ
ジャン＝ロジェ ●フランソワ・ネグレ
マルセル ●ブリュノ・クレメール
女教師 ●ファビエンヌ・バブ

LE ÉQUIPE TECHNIQUE ●
Mixe en scène / Scénario et Dialogues ● Jean-Claude BRISSEAU
Directeur de Production ● Maragaret MENEZ
Directeur de la Photographie ● Romain WINDING
Montage ● Maria Luisa GARCIA
Ingénieur du Son ● Louis GIMEL
Costumes / Decoration ● Lisa GARCIA
LES COMÉDIENS ●
Bruno ● Vincent GASPERITSCH
Jean = Roger ● François NEGRET
Marcel ● Bruno CREMER
Le Proresseur ● Fabienne BABE

ついて、「ぼく自信も学校で馬鹿なことをやった経験がある。ジャン＝ロジェの役は、ぼくのなかにあるそうした小さな部分を極限にまでもっていく作業だった。」と語っている。また映画のクライマックスでネグレが見せる酔払った状態の演技のために、ブリソーはオートー・プレミンジャーの『黄金の腕』で麻薬中毒者に扮したフランク・シナトラの演技を見せてアドバイスした。

そしてアナーキーな個性で強烈な印象を残すジャン＝ロジェの父親マルセルを演じるのは、ベテランのブリュノ・クレメールである。1957年にイヴ・アレグレの『女が事件にからむ時』で映画デビューを果たした彼は、64年のピエール・シェンデルフェル監督の映画『第317小隊』での荒っぽい曹長役で注目を集めた。主な出演作としては、ルネ・クレマンの『パリは燃えているか』、クロード・ルルーシュの『善人と悪人たち』、クロード・ソーテの『単純な物語』などがある。また最近では、アンヌ＝マリー・ミエヴィルの『マリアの本』(『ゴダールのマリア』第一部)での物静かな父親役が忘れがたい。なおブリソー作品への出演は、前作の『野蛮な遊技』に続いてこれが2本目。

ブルーノが淡い恋心を寄せる担任教師にはファビエンヌ・バブ。ジャック・リヴェットの『嵐ヶ丘』にも出演している若手女優。

なお、この作品のフランス語の原題〈De bruit et de fureur〉は、映画の冒頭クレジットに置かれたテキスト同様に、シェイクスピアの「マクベス」の一節に基づいている。また同時に、同じシェイクスピアのテキストを出典としているウィリアム・フォークナーの小説「響きと怒り」(フランス語題名はLe bruit et la fureur)への暗示も含まれている。

監督ジャン＝クロード・ブリソー

1944年生まれ。年齢的にはジャック・ドワイヨン、クロード・ミレー、アンドレ・テシネといった70年代世代とほぼ同じだが、学校の教師という本業をもつていたために正式な監督デビューはやや遅れた。1972年にスーパー・8で撮った処女作『十字路』がたまたまエリック・ロメールの目にとまり、彼に励まされたことが映画監督への道を進むきっかけになった。(ロメール自身も長くリゼの教師を務めていたことで知られている。)78年に撮影された長編第一作『そんな人生』は81年によく公開されたが、それ以後は83年に第二作の『野蛮な遊戯』、88年に本作品と、寡作だが堅実なキャリアを積み重ねつつある。なお昨春秋にパリで公開された長編第四作『白い婚礼』は、中年のリゼ教師と生徒の恋愛というテーマで、本作品のブルーノと担任教師の関係から引き継がれたものといえるだろう。彼の脚本の素晴らしいのは、フランス人独特の緻密さと、その映像表現に対して、まるでフランソワ・トリュフォーの再来?とまで言われ、その評価は高い。

1988年/フランス映画/LES FILMS DU LOSANG/ | 時間35分/アスキー映画株式会社

6月1日(土)よ 連日PM9:00より1回のみ上映
(銀座シネパトスは日曜除く)
レイトロードショー 当日1600円均一

熊野神社前ムー2F 03(3717)6341

自由が丘武蔵野館

劇場窓口、都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾンにて絶賛発売中

銀座三越先・歌舞伎座手前 03(3561)4660

銀座シネパトス